

## 2004 年度水資源・環境学会夏季現地研究会

### 「郡上八幡の夏・水と親しむ町」(2004 年 8 月 6 日～7 日) 報告

平井 拓也(株式会社クリアス)

記録的な猛暑となった 2004 年夏、今年も水資源・環境学会の主要な行事の一つである夏季研究大会が、「水のまち」岐阜県の郡上八幡にて行われた。今回訪れた八幡町は、去る平成 16 年 3 月 1 日、7 つの町村によって合併されたばかりの郡上市にある、人口約 1 万 8 千人の町である。

この郡上八幡というところは、「昔からの水利用形態が現存し、今も地域住民によって厳格に守られている町」として、あまりにも有名である(ということを大会の直前になって初めて知った)。

(初 日)

郡上八幡旧庁舎記念館が集合場所である。この建物は昭和 11 年に建てられた格式ある洋風建築で、平成 6 年までは八幡町役場として使用されていた。同 10 年には、国の登録文化財にも指定されている。

集合場所近くの食堂で朴歯(ほおば)味噌に舌鼓を打ちながら、参加者が 1 人 2 人と集まるのを窓越しに確認し、大会が始まるのを実感する。集合時間の 1 時をはるかに過ぎて重い腰を上げた小生らが最後に揃ったところで全員集合となり、郡上の地に明るい井口会員の案内のもと、総勢 18 名(初日)による郡上八幡水巡りの幕が切って落とされた。

#### 1. 宗祇水～やなか水のこみち

一旦宿舎に荷物を置いた後、まずは名水百選にも選ばれた宗祇水を訪れる。この水は郡上八幡の代表的な湧水であり、当地で草庵を結んだ室町の歌人・飯尾宗祇が愛飲したことが名前の由来である。早速賞味したが、猛暑の影響もあり、体の芯まで染みわたる冷たさ、とまではいかなかった。しかし、普段口にしている鉄管経由のそれとは比べ物にならない程美味しかったことは言うまでもない。また、水呑み場の足元には 4 つの槽があり、上から順に飲料、冷却、洗い場、さらし場という順での利用形態がと

られている。我々が訪れたときは、地元の住民が利用している様子はなく、専ら観光客で賑っていた。

次に、水巡りと銘打ちながら、当地の人気スポットの一つである食品サンプル工房へと向かう。

郡上八幡はロウ細工発祥の地でもあり、食品サンプル(食堂入り口のディスプレイに陳列されているメニュー)出荷の全国 No.1 のシェアを占めているそうである。店内には本物そっくりの食品サンプルが数多く並んでおり、特にフルーツのサンプルなどは思わず口の中に入れてしまいそうである。ここで早速お土産を買う者が現れた。

続いて、「やなか水のこみち」へと移動する。

全長 100m くらいの水路で、およそ 8 万個とも言われる数の玉石をふんだんに敷き詰めた、通称「ポケットパーク」と称されるコンパクトな親水空間である。主に住民や観光客が憩い、交流することを目的に整備され、このような施設を町中に点在させることで「水のまち・郡上八幡」をアピールする構想であるのだが、実際には観光客に占拠され、ゴミのポイ捨ても見受けられた。そして何よりも、肝心の住民がこれらの施設を日常的に利用しているイメージがどうしてもできなかつた。色々な考え方があると思うが、観光資源としての価値との引き換えに、良好な水路の消失の懸念という諸刃の刃を痛感した。

因みに、この時点で余りの暑さに耐え兼ねたのか、ソフトクリームを買う者が続出する。その後一行は、引き続き熱心に街全体を見学する者、余りの暑さにひたすら喫茶店で涼をとる者、そそくさと宿舎へ戻ってへたり込む者、昼間からいきなりアルコールを浴びる者と、まるでマラソンの脱落者のごとく、次々と離散し始める。早い話、当初のスケジュールがあえなく破綻してしまったのである。

#### 2. 宮ヶ瀬橋～新橋(吉田川)

長良川水系の吉田川に架かる橋で、特に新橋は地

元の子供が橋の上から度胸試しに飛び込むことで有名であるが、最近の子供は率先して飛び込むことはしないらしい。しかし、訪れた観光客としてはガイドブック等で仕入れてきた情報の通りに飛び込んでほしい。実は小遣いをやるから飛び込んでくれ、とのリクエストがあるまで待機しているのだそうである。故に最近の小学生はしたたかである。

続いて、創業 430 年、八幡町内で唯一天然の藍のみを使用しているという渡辺染物店の藍染めを見学する。店の中を覗くと、土間に糞が埋め込んである。その中に石灰・麸などを加えて染液を醸成しており、布は 10 回以上も繰り返し浸して染められるという。実際に糞の中から出した絞染めを店の前の水路でさらし、広げたものを見せて頂いたが、快晴の青空も手伝って見る見るうちに見事な藍色に染まり、見学者からはため息が漏れた。

(豆知識)

藍染めから発散される成分には防虫効果があり、昔は絹の着物を保存する風呂敷として役立てたという。こうした一連の工程を知ってしまうと、使うことをためらい、ついたんすの奥にしまい込んでしまいそうであるが、やはり実際に使いこんでこそ、一層藍の味わい深さが出てくるのであろう。

### 3. いがわこみち&島谷用水

大会の集合場所であった郡上八幡旧庁舎記念館の横が入り口であり、下流部は島谷用水へと続く。この島谷用水は郡上八幡の中では一番大きな用水で、洗い場の数も多い。さらに、どの家の裏も洗い場へ降りる階段があり、用水との密接な関係が伺えた。また、ところどころで鯉の他に、本来上流部でしか生息できないアマゴ(恐らく養殖だと思うが)も飼育されていたことから、かなり良好な水質を維持しているのであろう。

### 4. 乙姫川

乙姫川は吉田川へ流入する短い河川で、直接洗い場として利用されている。特記すべき点は、一本の河道が通常の水路、用水路、排水溝と用途別に分流されていることである。用水として利用する河川で

あるので、家庭からの排水を直接流入させずに左側の排水溝で受け、集落が途絶える下流部で合流させ、吉田川に排水している。自分たちだけが上流部の汚れを回避するのではなく、下流部の影響も配慮したシステムに、用水は町全体の財産であるという思想の徹底を感じた。

ここまでの所要時間はざっと 2 時間程度で、徒歩だけで十分回れるエリアである。しかし、今回のような暑さを考慮すると、レンタサイクルもあるので、そちらを利用するほうが賢明であろう。

いよいよ次は、今回の楽しみの一つであった夕食である。例によって喫煙者の指定席である隅っこへ追いやられたことはさておき(正面の席は、やはりいつもの喫煙者) 楽しく食事を満喫した。

注目の献立は、これでもか、という程の鮎尽し。塩焼き、田楽味噌に始まり、鮎鮎、刺身、そして初めて味わった鮎雑炊(味は今イチ、鮎が持つ素材の良さをスポイルしている。そもそも鮎は煮炊き用の魚ではない)とバラエティーに富んでいた。また、鯉の洗いが非常に美味しく、生魚に拒絶反応を示す某会員の分も頂戴し、十分に堪能した。その他にもウナギの蒲焼き(欲を言えば井で賞味したかった)郡上牛のステーキなど、ボリューム万点の食事であり、正直この後に始まる郡上踊りへ出かけるには非常にタイトな状態であった。

### 5. 郡上踊り - 日本最長期間の盆踊り -

郡上踊りの大きな特徴は、開催期間の長さにある。7月中旬の「踊り始め」から9月初旬の「踊り納め」まで、実に2ヶ月近くにも及ぶ。また、この踊りは八幡町内の様々な場所で催され、毎日場所を移して行われる。我々が訪れた日は、郡上八幡城の麓に立地するホテル積翠園前で行われたが、我々の宿泊先からは結構な距離があり、満腹の状態で急勾配の坂道を歩くのは非常に辛いものがあった。

この踊りのハイライトは、8月13日~16日の4日間、明け方まで踊り明かす徹夜踊りである。履いている下駄が擦り減るので、予備が必要だったという逸話もある。参加者の数もピークに達し、郡上八幡の熱気がクライマックスに突入する瞬間である。

踊りの種目も多く、実に 10 種類を数える。因みに、そのうちの 1 つだけを習得した某会員の満足げな表情が非常に印象的であった。

宿舎に戻り、つまみとアルコールを抱えて部屋に集合したが、皆さん昼間の体力の消耗が顕著であり、思ったより早く床に就いた（やや拍子抜け）。

## （2 日目）

午前 7 時 30 分、爽やかに起床。同 8 時、たらふく飯を食らう。普段は目覚めが悪く食欲もない中、コーヒーで無理やりパンを流し込んでいるという状態であるが、このような場所に来ると目覚めは快適、食欲は旺盛であるから、いかにストレスから開放されているかが分かる。朝食後、出発までの空き時間を利用し、初日に周りきれなかった古い町並みを流れる用水を見に行った。

さすがにこの時間帯は、近所の人同士が歓談をしたり、犬が水を飲んでいたり、非常に和やかな様子であった。また、初日の日中に見ることのできなかつた水利用に関しては、障子の棧を洗っていたり、じょうろに水を汲んで植木に撒いていたりと、事前に紹介されていた通りの光景を確認することができ、ささやかながらも目的を達成できた感があった。

お世話になった宿泊地「吉田屋」を後にし、長良川沿いをひたすら南下、岐阜市内へと向かう。まずは道中の美並町にある「日本まん真ん中センター」に立ち寄る。ここは、かつて美並町（当時・美並村）が日本の人口重心地であったことを記念して建設された施設であるが（Internet で調べると日本の中心と誤解している例多数）、2000 年の調査では隣町の武儀町に移り、現在は人口重心から外れている。因みに明治時代の人口重心は滋賀県に位置していたとのことで、東京への一極集中が如実に現れている。

## 6 . 美濃市 - うだつの上がる町並み -

美濃市は古くから和紙の産地として有名な地域である。そして、その和紙で富を得た商人が家に築いたのがうだつ（火災の延焼を防ぐために屋根の両端に設けた防火壁、漢字では卯建と書く）である。現在用いられている「うだつが上がらない」という

言葉の起源は、富の象徴である「うだつ」を上げる程の境遇にない（金銭的余裕がない、パツとしない）状態が由来のようであり、当時における商売繁盛の指標の一つであったことが伺える。ここでも郡上八幡と同様、フリータイムを設ける。お土産を買う者、もはや歩く気力も無くひたすらクーラーにへばりつく者など、集合時間までめいめいの時間を過ごした。

昼食後、約半数の参加者は別のコースを選択し、プチ解散となる。我々一行は、昔ながらの日本家屋が軒を連ねるレトロな街、川原町へと向かう。

## 7 . 川原町（岐阜市）

鵜飼の鑑賞スポットとして有名な長良橋下で、地元在住の富樫会員より説明を受けて出発する。

この一帯は、かつて長良川の川港として栄えた街で、昔ながらの町屋が多く残っており、並び建つ町屋の格子は時代劇の風景そのままである。また、新しい建築物にも極力調和を乱さない色使いがされており、木目調の自動販売機なども存在した。個人的には門灯を吊るしている家の多さが印象的であった。例によって喫茶店で避暑。この店に限らず、みやげ物店や和菓子店など、どの店も余計な手を一切加えず、当時の雰囲気を残したままで営業していた。散策道の端点である逆水樋門を折り返して出発地点の長良橋へ戻る。これにて大会の全行程を無事に消化。この後に行われる長良川花火大会の混雑を回避するため、やや早めの帰途についた（一般の観光客とは完全な逆行）。

今大会においては、恐らく 1 ヶ所回る毎に水分の補給をしていたのではないだろうか。今、原稿を書いているも真っ先に頭に浮かぶのは、とにかく暑かったことである。見学対象エリアがさほど広くなく、車が不要であったことがかえって歩く距離の増加になってしまい、体力的な消耗に関しては今後の課題となった。しかし、じりじりと焼けつく日差しが降り注ぐ水量たっぷりの吉田川の光景は圧巻であった。ここに住めば、川の流れや水の音が全てを洗い流し、身も心も健康でい続けられるのではないかと思うほど、雄大さを備えた町であった。釣り竿を持ってこなかったことを非常に後悔した。